Japanese Association for Religious Studies



え、儒教における性理説を学んだ。その結果、「性理の蘊奥」を極めるに到ったという。道二は「文字には疎」かったために、梅岩や堵庵が語るような学問的素養がなかった。そのために、石門心学に入門するまでは、自らの宗教的な境地を体系立てることがなかったのかもしれない。しかし、布施松翁の勧めによって堵庵心学を学び、人の人たるあり方を言語化するための理論的基盤を獲得した。つまり、道二は禅によって到達した宗教的境地について、堵庵が説く儒教によって論理的な意味づけを行ったと言えるであろう。

## 経営倫理における石門心学の意義――現状と展望――

中道　豪一

いわゆる「経営倫理学」は、二〇世紀後半の三〇年に起こった学問的・社会的動向に起因すると言われている。特にアメリカで発生した経営倫理の運動が有名であり、梅津光弘はそれを「哲学・倫理学の背景」「経済学・経営学の背景」「実業界およびアメリカ社会一般からのニーズ」（『経営倫理』第二章：梅津光弘）という領域の学際研究として成長する過程を指摘する。

学の研究対象である「経営倫理」だが、日本では「Business Ethics」の訳語として用語が成立した事情から、時には「企業倫理」と表現されるものと内容が重なる場合がある。この併用を否定する気はないが、法令遵守（compliance）さえすれば、どんなビジネスをしても良いという悪解釈を回避するためにも、経営倫理・企業倫理はＣＳＲ（corporate social responsibility：企業の社会的責任）概念を含んだ「Management Ethics」を本質として理解すべきと考える。

杉本泰治は企業倫理について「生き残りの条件」を満たす必要があると説くが、そうした状況下で石門心学はいったいどのような意義を見出されているのだろうか。芹川博通は経済倫理の淵源として評価し（『いまなぜ東洋の倫理か』北樹出版、二〇〇三）、日野健太は現在の企業倫理を考える一例として評価するが（「石田梅岩の企業倫理」『江戸に学ぶ企業倫理』生産性出版、二〇〇六）、注目すべきは平田雅彦のＣＳＲと関連させて石門心学を評価した『企業倫理とは何か』（ＰＨＰ研究所、二〇〇五）である。

平田は企業の存続には「持続可能性」「ステークホルダーとの相互関係の深化」が不可欠であり、その際に必要なのがトップ経営者の倫理観に基づく「自発性」だという。そしてそこで必要とされる「欲求と倫理のバランス」を培う素材として石門心学を評価している。その論考では商人の存在意義、コスト管理の意味、企業利益の意味、自然の理法と経営思想の関係、ＣＳＲの意味、持続可能性の意味といった現代的関心から、石田梅岩の言説が消化されている。梅岩の説いた「人の人たるの道」に立ち返り現在を見るわけである。こうした平田の見解は、おおむね石川謙・竹中靖一・柴田實といった先行研究の成果の上に展開されていることからも、経営倫理における石門心学の評価としても有効と考えられる。

こうした現況を踏まえての展望だが、この平田によって示された切り口を深め、「欲求と倫理のバランス」を整える、より良い方法を模索する方途が考えられる。この点に於いては石門



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



心学の教育方法についての考察が相当するわけだが、この分野の研究はあまり盛んではない。例えば心学の修行法（心学策問・静坐・会輔など）をどう考えるか。心学者が重んじてきた『莫妄想』の評価。近現代に活躍した心学者（山田敬斎、柴田謙堂など）の評価などが具体例として挙げられる。そして次に人文系・社会学系の学者における先行研究精査の漏れを指摘することが必要と考えられる。例えば「道話」が注目されるが、それは心学の一側面でしかない。心学の全体像を踏まえずに、正直・倹約といった徳目を列挙する論考も散見している実状には注意を払う必要がある。

以上、経営倫理をめぐる状況を確認した上で、石門心学が「欲求と倫理のバランス」を整える素材として意義を認められていることを確認し、そこから考えられる展望を例示した。

## 第八部会

### 形なき「安心」――福澤諭吉の人生観に表れる宗教性――

島田雄一郎

幕末から明治期にわたり言論活動を展開した福澤諭吉は、その晩年、みずから「福翁」と称した時代に、「安心」（この語は福澤において「あんしん」とも「あんじん」とも読まれる）、もしくは「安心決定」という語を多く用いて、自身の処世術を披歴した。福澤は、みずから「宗教の外に逍遥」すると述べているように、特定の宗教的見地に固執してその教理を語るということは生涯なかった。先行研究において指摘されている通り、福澤において「宗教」とは、あくまで道徳的効用の観点から理解されていたと言える。ゆえに、福澤が「安心」という語を用いてその処世術を説明するとき、死の恐怖の克服や、浄土への往生といったことを媒介とせずに、現在の人生の充実が図られることとなる。以上のような特質を持つ福澤の「安心」言説について、先行研究では、主に『福翁百話』（明治三〇［一八九七］年）において展開された「人間の安心法」が検討されてきた。

この福澤の「人間の安心法」について、それが福澤の思惟様式の特徴として説明され、そこに「人間中心主義」の志向が顕著であることが指摘されている。あるいは逆に、その思惟様式が「天」の観念によって支えられていたことがこれまでに指摘されている。



NII-Electronic Library Service